

たたかう労働組合・回転寿司ユニオンに総結集して、労使関係正常化闘争を完遂しよう！

労使関係の正常化をめざして

編集・発行：回転寿司ユニオン

8

2026/1/16

企業内組合・山崎健太郎中央執行副委員長、営業部会議でデマ連発 「回転寿司ユニオンはやめられない」「プラカード持ち強制される」

回転寿司ユニオンは、昨年11月6日に開催された、はま寿司会社の「東日本営業部会議」の情報を入手した。この会議で、なぜか休職中であるにもかかわらず出席していた、企業内組合の山崎健太郎中央執行副委員長から、回転寿司ユニオンに対するデマ発言が連発した。

山崎副委員長は、まず「外部ユニオン（＝回転寿司ユニオン）ができた」ことを報告し、「入るのは個人の自由」としたうえで、「福利厚生は私たちのほうがしっかりしている」「（回転寿司ユニオンは）すぐにやめられない」「プラカードを持つ行動を強制している」などと発言して、会議に出席した社員をけん制したのだ。

続いて、会社側の対組合窓口であり、団体交渉でも主担当として出席している山中直人事部長（企業内組合定期大会にも、町野岳社長＝当時＝とともに来賓として出席していた人物）が、回転寿司ユニオンとの交渉で実現した時給計算完全1分単位化について報告した。

言わずもがなであるが、私たちが組合員に「プラカードを持つ行動を強制している」事実はない。もちろんストライキ行動や社前行動の際にプラカードを掲げることはあるが、そもそもこれらの行動に参加するか否か自体が組合員の自由であり、ましてやプラカードを持つことを強制している事実などあるはずがない。というか、まだ「回転寿司ユニオンはま寿司本部」を設置して以来、はま寿司社籍のある組合員の参加する宣伝行動は一切開催しておらず、山崎氏が回転寿司ユニオンの活動の内実を知る由もなかろう。

さらに滑稽なのは、「すぐにやめられない」という発言だ。ご承知の通り、実際に「すぐにやめられない」のは「組合を脱退した者は解雇する」旨のユ・シ協定を会社と締結している企業内組合のほうだろう。組合脱退の自由が尊いというなら、ただちにユ・シ協定を破棄してはどうか。

ところで、休職中の山崎氏が、いったいどういうご身分で営業部会議というきわめて機密性の高い会議に出席して、あれやこれと発言しているのだろうか。これで会社は与り知らぬというのはまさか通らない。すなわち、会社が黄色組合を利用して、回転寿司ユニオンへの加入を妨害していたことが改めて明らかになったということだ。

80～90年代の国鉄・JR東日本を彷彿とさせる労務政策 しかしその末路は・・・

しかし、このような「職制まで組合組織を固め、大会に社長や人事部長を呼び、会社の会議でたたかう労働組合批判・・・」とくれば、彷彿とさせるのは総評解体～「連合」結成にいたる労戦の右翼的再編、中でもとりわけ激しかった国鉄～JR東日本の国労・全勤労つぶしの労務政策だろう。

当時のJR東日本は、「東鉄労（旧勤労、鉄労、日鉄労など＝現在のJR東労組）を基軸とする労政」を掲げ、東鉄労とともに、あくまでもはたらくものの権利と国民共有の財産を守ろうとする国労や全勤労の組合員を徹底的に痛めつけた。東鉄労も「一企業一組合」を標榜し、まさに東鉄労の天下ともいえる状況だっただろう。

しかし、それでは今のJR東日本や東労組はどうなっているか。18春闘でのスト通告をてことして、会社は「労使共同宣言」の破棄を通告。会社主導で「社友会」なる組織を立ち上げ、4万人以上いた東労組の組合員は、わずか数千人にまで激減してしまった。

さらに特徴的なのは、東労組の「崩壊」以降、間接・非現業や総合車セの社員を中心として、なんとか労使「協調」路線での生き残りをめざす「新鉄労組」なる組織が分裂したが、「社友会」養殖路線に舵を切った会社にとつてはもはや利用価値もなく、大した拡大もできずに、結局「JR連合」（旧鉄労、鉄産労系の養殖産別）傘下の「ジェイアール・イーストユニオン」と合流してしまったのだ。

以上からわかることは、御用組合は、一時的には会社と蜜月な関係をもって栄華を誇ったとしても、やはり最後には用済みとして切捨てられるのが宿命だということだ。もっとも、すでに「はま寿司従業員組合会」が形式的にも労働組合でない「社友会」レベルの組織だというのであれば話は別だが。